也、打出之小槌とは鍬也、○略下

〔燕石雜誌四〕桃太郎

童話に昔老夫婦ありけり、夫は薪を山に折、婦は流に沿て衣を浣ふに、桃實一ッ流れて來つ、携かへりて夫に示すに、その桃おのづから破て、中に男兒ありけり、この老夫婦原來子なし、この桃の中なる兒を見て喜て、これを養育(ハグ)み、その名を桃太郎と呼ぶ程に、○略註その兒忽地大きになりつつ、膂力人に勝れて一鄕に敵なし、一日その母に、黍團子といふもの夥と、のへて給はれといふ、母その故を問ば、鬼(ガ)島に趣きて寶を得ん爲也と答ふ、父聞ていと勇と譽て、そのいふまゝにす、○中略遂に鬼(ガ)島に至り、その窟を責て、鬼王を擒にす、鬼どもその敵しがたきを見て、三ッの寶物隱蓑、隱笠、打出ノ小槌を獻りて、主の命乞せり、斯て桃太郎その寶を受て鬼王を放し、犬猿雉を將て故鄕に歸り、思ふまゝに富さかへて、父母を安樂に養ひしといふ、

〔夫木和歌抄三十二蓑〕かくれみの　信實朝臣

きまほしきよのうき時のかくれみのなにかは山のおくもゆかしき

衣笠內大臣

かくれみのうき名をかくすかたもなし心におにをつくる身なれど

〔後拾遺和歌集十九雜〕小倉の家にすみ侍けるころ、雨のふりける日、みのかる人の侍りければ、山ぶきの枝をおりてとらせて侍けり、こゝろも得でまかりすぎて又の日、山吹のこゝろもえざりしよしいひにおこせて侍りける返事に、いひつかはしける、

中務卿兼明親王○醍醐皇子

なゝへ八重花はさけども山ぶきのみのひとつだになきぞかなしき

〔我おもしろ上冬〕人のもとにみの紙をこひにつかはすとて